

MY GENERATION

マイジェネレーション

志茂田景樹

SHIMODA Kageki

絵本作家・児童書作家・小説家
読み聞かせ隊長

1940年、静岡県生まれ。中央大学法学部卒業後、さまざまな職業を転々とする。76年に『やっこ探偵』で小説現代新人賞を受賞。80年、40歳のときに『黄色い牙』で直木賞を受賞。執筆活動のほかに、98年より児童への絵本の読み聞かせ活動を開始し、翌年に『よい子に読み聞かせ隊』を結成、それを機に絵本や童話の創作も。最近ではTwitterでの人生相談が話題となりフォロワー数は25万人を超える人気に。近著にその投稿をまとめた『きつとうまくいく 人生、今が出发点』（ナツメ社）のほか、『人生はもっと簡単にうまくいく』（宝島社）など。

子

供に絵本を読み聞かせる活動を始めて16年目になります。きっかけは『KIBA BOOK』という出版社を立ち上げ、全国の書店で行ったサイン会でした。子供たちが聞き入ってくれただけでなく、40代くらいの女性から「嫌なことがあって落ち込んでいたけれど、お話を聞いているうちに元気になりました」と、声をかけてもらって。読み聞かせにそんな力があるのかと驚くと同時に、これからも続けていこうと強く思った。そして、僕自身も絵本の創作を始めたんです。

絵本はみなメッセージを持っていません。読み聞かせに理屈はいらない。それを目の当たりにしたのは、阪神淡路大震災で被害を受けた兵庫県西宮市の小学校に招かれた2000年のこと。実は僕の絵本は別れの悲しい場面が多いのですが、震災から5年経っても、後遺症に苦しむ子供たちに聞かせていいものか。悩んだ末に、先人観抜きにいつものようにやってみたところ、やはり多くの子が泣いたものの、その表情はとて素晴らしいものでした。絵本のメッセージは感動を通して、子供の心に届けることができる実感した瞬間でした。そして、命の尊さ、

生きることの素晴らしさを伝える絵本を中心に読み聞かせようと決めたんです。読み聞かせにコツはありません。語る人によって声も人間性も違うのだから。ただ言えるのは、子供たちと一緒に物語の世界を楽しみ、そして継続すること。1年も経てば、その人にかかせない持ち味が出てくるものです。

還暦からが人生の幕開け

昔は三世代同居が一般的で、自然と祖父母が孫育ての役割を担っていたけれど、今はそういう時代ではなくなっています。でも、シニア世代が長年蓄積してきた体験や知恵はバカにできないものがある。それを孫世代にどんどん伝えていくって大切ですよ。子供たちも体験に基づいた話は価値があると直感でわかっている。そうして伝えられたことに創意工夫を加えて、新しいものを作り出していくはずですよ。

年寄りだって、自分が役に立っていると思えば、生きがいになるでしょう。僕の世代にはお金も時間もあって何不自由ない暮らしをしている人もいます。でも、まったく不自由がないって、実はあまり幸せじゃない。少しの不安や恐れがあったほうが、人間は幸福を感じ

じられるのではないのでしょうか。それに悠々自適すぎる生活は急激な老化を招きかねないと思うんです。

還暦を迎えた途端に、老け込んでしまっている人もいます。でも、気の持ちようですよ。僕は還暦になる時、「これからは新しい0歳、新0歳でいこう」と考えました。60歳を迎えた朝はとても爽やかな気分でした。意識を変えるだけでリフレッシュされ、人生の幅や奥行きが増したような感覚になれるものです。シニア世代になってからも人生はまだ長い。気持ちを切り替えることで、無意識のうちに健康にも気をつけるようにもなります。

今年、僕は新14歳になりましたが、やりたいことはいろいろあります。たとえば、ここ数年、正月の恒例になっている東海道のウォーキング。歩きながらさまざまな未知のものに出合うのが楽しく、刺激も受けるんです。東海道を歩き終わったら、中山道やみちのくなど、時間を見つけては緩やかに旧道と親しもうと思っています。もちろん創作面でも、これまでになかった小説を書きたいし、新たな絵本や童話づくりもしたい。夢はまだまだ尽きません。

読み聞かせを通じて伝えたい
命の尊さ、生きることの素晴らしさを

